文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

▲絵はがき『東京本郷森川町通り』

第19号／平成24年6月1日発行

近代医学のあゆみと、“医”のまち文京 2

小学校の姿を残す —絵はがきに見る文京— 4

弘化三年正月の大火 6

平成23年度のあゆみ 7

資料をご寄贈くださった方々 8

平成24年度の催し 8

近代医学のあゆみと、“医”のまち文京

「医のまち」文京のはじまり

「大学のまち」、「印刷・出版のまち」、「文人・作家にゆかりのまち」、そして「坂のまち」。

文京区には、いくつもの地域的特色があります。医科大学（病院）や製薬会社、医療機器会社が多数所在する、「医学・医療のまち」も、その一つです。では医学・医療のまちとしての特色は、いつから始まったのでしょう。

「赤ひげ」の頃

享保 7 年（1722）のこと。町医者・小川笙船（おがわしょうせん）が目安箱に投じた建言書が契機となり、様々な理由で治療や手術を受けられない庶民を対象とする医療・福祉施設として、小石川養生所が設けられました。場所は小石川御薬園内の一部、現在の東京大学大学院理学系研究科附属小石川植物園内の一画にあたります。園内には、養生所当時の史跡が遺されています。小石川養生所については、山本周五郎の『赤ひげ診療譚』での、活き活きとした人間描写が評判となり、これまで幾度となく TV ドラマや映画となっています。

小石川植物園内に遺る養生所ゆかりの井戸

近代医学の黎明

江戸時代は、オランダを経由して様々な分野で「洋学」知識や技術が導入されました。一方、医療では東洋医学が主流で、杉田玄白、前野良沢らにより、安永 3 年（1774）に「解体新書」がまとめられたものの、将軍奥医師（御典医）は、漢方医師たちが実権を握っていました。

大坂で適々齋塾（てきてきさいじゅく）（通称、適塾）を主宰し、蘭学を基礎とした西洋医学を講じていた緒方洪庵は、文久 2 年（1862）、将軍の奥医師の一人として江戸に招聘（しょうへい）されます。既得権益を守りたい他の奥医師らによる誹謗中傷、そして妨害にもめげずに緒方ら、蘭学医は奮闘します。

残念ながら、志半ばにして緒方は病に倒れたものの、その遺志は、門弟らに受けつがれてゆきました。

近代医学の黎明期を支えた医学者の一人、緒方洪庵は、駒込の高林寺（文京区向丘二丁目）に葬られました。墓所には、緒方洪庵の事蹟を顕彰する石碑「追賁碑（ついひひ）」も建立されています。

文京区指定史跡『緒方洪庵墓』

その緒方を支えていた蘭学医の一人が、小石川三百坂下（現・文京区小石川四丁目）に住まいした手塚良安（良仙）です。良安から数えて 3 代目の子孫に、大阪大学医学専門部に学んだ治がいます。治は、医師の資格は取得したものの職業医師には就かず、“治虫”の筆名で世界的に著名な漫画家となり、『ジャングル大帝』や『火の鳥』など数多くの作品を物しました。手塚治虫の医者としての知識は『ブラック・ジャック』や『きりひと讃歌』、そして良安を主人公とした『陽だまりの樹』に発揮され、いずれも秀逸な医学漫画との誉れ高い作品です。

医者の業績のみならず、それを陰で支えた人々の功績も近代医学史において忘れることはできません。

駒込追分（現・文京区向丘一丁目）の“美幾（みき）”は、家計を助けるため幼くして吉原遊廓に入ります。漸（ようや）く年季の明けた頃には、過酷な労働と引き換えに梅毒を患います。余りに惨い代償でした。施療所の医師から「篤志解剖」（現在の献体）に応じた者には遺族に功労金が下賜されると聞いた美幾はこれに志願します。明治 2 年（1869）、34 歳で死去した美幾は、篤志解剖第 1 号として、大学東校（とうこう）（後の東京大学医学部）で解剖後、小石川の念速寺に埋葬されました。墓所は文京区史跡として指定され、無縁仏となった今も手篤く祀（まつ）られています。その翌年には、同じ様な境遇にあった小日向水道町の“は津（つ）”が、篤志解剖第 4 号に志願し、目白の本住寺に葬られたのです。

森林太郎は幼い頃から津和野藩の俊才として知られ、実年齢 13 歳にして東京大学予科に入学。東京大学卒業後、ドイツ留学を経て、帰国後には陸軍軍医としての最高位に栄達する一方、夏目漱石と並ぶ近代文学の巨頭、森鷗外として知られています。森は上京間もない頃と、帰国後の一時期を除いて、本郷区駒込千駄木町（現・文京区千駄木）に住まいし、終焉の地「観潮楼（かんちょうろう）」跡は、東京都指定旧跡となっています。

ところで、森林太郎と同時代の医学者の多くは、明治政府の国策としてドイツに留学しています。実は、このことも、文京ゆかりの医学者との関わりがあります。

文京ゆかりの医学者との関わりがあります。

ドイツ医学の導入と相良知安

倒幕運動の中心となった、薩長土肥四藩の出身者は、政府中枢を薩摩・長州出身者が、海軍は薩摩閥、陸軍は長州閥が大勢を占め、旧土佐藩や旧肥前藩の出身者は、それ以外の官職に甘んじるか、板垣退助のように政府から追われ、論客として野に下らざるを得ませんでした。

医療福祉行政は現在、厚生労働省の所管ですが、その前身の厚生省が昭和13年(1938)に設置される以前は、文部省や内務省、そして警察などが所管していました。医学校(現在の東京大学医学部)を所管する文部省医事取調として、明治政府の医療行政の実質的な責任者であったのは、肥前・鍋島藩医の家系に生まれた相良知安です。

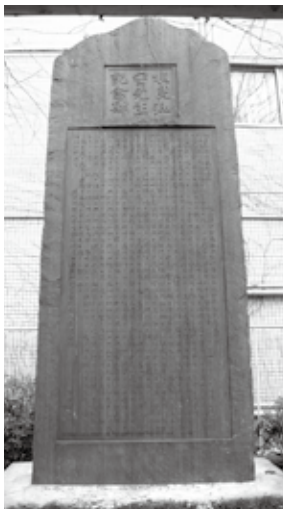
相良は幕末期に長崎や江戸へ遊学し、佐倉順天堂(現在の順天堂大学)の塾頭も務めました。明治政府の参議としてイギリス医学の導入を図る旧土佐藩主・山内容堂らと激しく対立、これを論破してドイツ医学導入の中心的役割を果たします。そんな中、突然、無実の咎で当時の警察組織、弾正台に拘束され、およそ2年の歳月を獄中で過ごします。出獄後は、医学校校長として再び政府に仕えるものの、程なく辞職し、易者として暮らすも、晩年は不遇であったといいます。

相良は医事取調当時、本郷区弓町(現・文京区本郷一丁目)や、同区真砂町(現・文京区本郷四丁目)、更には同区千駄木四軒寺町(現・文京区向丘二丁目)を経て、芝区芝大門町(現・港区芝神明町)の長屋に住まい、明治39年(1906)、この地を終の棲家としました。

相良は生前、「おいが、異風かんたか」を口癖にしていたといいます。佐賀弁で、私が変わり者なのだろうかという言葉の吐露には、医療行政の最高責任者の地位にありながら、理由もわからぬまま、一方的に投獄され、流転の生涯を送った相良の胸中や心情が偲ばれます。

相良知安の遺骨は、郷里佐賀の城雲院に葬られましたが、昭和10年(1935)には、東京大学医学部関係者らの尽力により顕彰碑が建立され、厳かに、その事蹟が伝えられているのです。

相良知安肖像（相良隆弘氏提供）



顕彰碑（東京大学構内）

佐倉順天堂、済生学舎から順天堂大学、日本医科大学へ

江戸時代、佐藤泰然が開いた蘭学塾・佐倉順天堂からは、数多くの蘭学医が輩出され、西の適塾、東の順天堂などと呼ばれ、全国から西洋医学を学ぶ者が入塾しました。

泰然は実子、良順を蘭学医・松本家に養子に出す一方、山口尚中を養子に迎えるなど、人材育成に努めました。蘭学塾は、現在の順天堂大学・医院の母体となりました。

幕末期に佐倉順天堂に学んだ長谷川泰は、明治9年(1876)、本郷元町に医学教育を目的とする私塾・済生学舎を設立します。以後、内務省医術開業試験合格者を輩出するも、明治36年(1903)の専門学校令による大学設置認可を得られず、失意の長谷川は、突如として学舎を閉鎖します。しかしながら教え子らの尽力で、その教育は今日の日本医科大学へと継承されてきたのです。

文京の地には、江戸時代の小石川養生所を嚆矢として、明治年間以降は、官立の医療・教育機関として東京大学医学部の前身、東京医学校が置かれました。また、私立の医療教育機関として日本医科大学、そして順天堂大学が設置され、数多くの医学者を輩出して来ました。

女子師範学校(現・お茶の水女子大学)第一期卒業生の荻野吟子が、公許第一号の女医として本郷区湯島三組町(現・文京区湯島三丁目)で開業したのは、明治18年(1885)のことです。そして身よりのない子供や老人のための社会福祉・医療施設として、本郷の旧加賀藩邸跡(後に、小石川区大塚辻町に移転)に東京市養育院が設けられるなど、文京区は近代医学発展の礎が築かれたまちといっても、決して過言ではありません。

ところで、先述の森林太郎は、文学者・鷗外としての顔に加えて、多芸多才なことでも知られています。

慶應義塾での講師や、退役後は帝室博物館に勤務した美術史家として、あるいは実弟、篤次郎との共著を出す戯曲家として著名な一方、本業である軍医・衛生学者としての業績については、あまり知られていないのが実情ではないでしょうか。

森はまた、稀代の“論争”好きとして知られていますが、医学分野では“脚気”についての論争が有名です。

森とほぼ同時期にドイツに留学し、細菌学の世界的な権威、ローベルト・コッホに師事し、ノーベル医学賞の第一号候補となった伝染病研究所所長・北里柴三郎や、海軍軍医・高木兼寛らとの間で繰り広げられた、この、脚気論争とは、果たしてどんなものだったのでしょう。

平成24年度の特別展では、「医のまち」文京を舞台とした、近代医学発展のあゆみについてご紹介します。

どうぞ、ご期待下さい。

（加藤　元信）

小学校の姿を残す
―絵はがきに見る文京―

絵はがきという言葉から、何を思い出しますか。きれいな絵や写真のついたはがきと思う人もいるでしょう。また、写真やイラストで飾った年賀状も、絵はがきの一種とも考えられます。その時、共通するイメージは、9㎝×14㎝ほどの手のひらに乗るくらいの紙片ということでしょうか。この紙片にさまざまな絵柄や写真が印刷され世の中に広がっていく歴史には、その当時の社会情勢や人々の生活などさまざまな影響がありました。

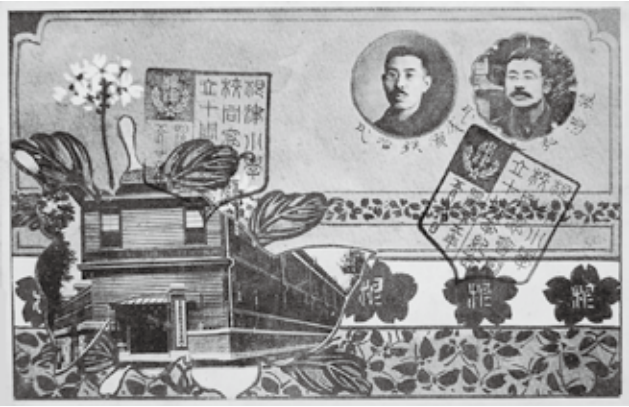
絵はがきの始まり

日本の絵はがきは、明治33年(1900)に私製はがきの使用が認められたことが始まりとされています。そして、明治37年に日露戦争の戦役記念の絵はがきが発行されると、それを買い求める人々が殺到しました。その後、次々と絵はがきは発行され、蒐集が流行しました。流行は広がり、絵はがきを集めるだけでなく、集めた絵はがきの交換会が開かれたりもしました。雑誌の付録に絵はがきがついたり、絵はがきの図案や文章を取り上げる絵はがき専門の雑誌も創刊されました。

【図2】東京市林町尋常小学校（満十五年ノ今日）校舎全景

大正2～3年(1913～14)にかけて出版された『独立自営営業開始案内』には、「売薬業」「書籍業」「清涼飲料水製造業」「西洋洗濯業」「写真業」「質屋業」などさまざまな業種を開業する方法が書かれています。そのなかに「絵葉書店」として、絵はがき販売を始める時の準備や心得などが紹介されています。「絵葉書の販売業は、他の商業とは違ひまして、少しも経験を要しません。誰が始めましても、今日着手して明日から開業することが出来ます。」と、絵はがきの販売を始める手軽さも書かれています。また、絵はがきの仕入れ方や店先での並べ方など、開店の準備からその後の経営方法も説明されています。絵はがき数枚をセットにして袋などに入れて売ることや、セットで売る場合、絵はがきは8枚ずつ印刷するため、あらかじめ8枚やその倍数に合わせて絵柄を決め、絵はがきを作成すると無駄がないとしています。あるいは、人気のない絵柄が売れ残るのを防ぐために、店でセットを作り袋詰にして売るのも良いと紹介しています。

【図1】根津小学校同窓会創立十周年紀念



絵はがきの絵柄は、風景、動植物、風俗、芸術作品などさまざまなものがありました。前述の『独立自営営業開始案内』には、「戸数の五百か千有る都会ならば、名所旧蹟ならずとも、屹度(きっと)其の町の絵葉書が有ります。それに、臨時の出来ごと、天変地異、或は陸海軍の演習とか産業其他の共進会とか、学校の卒業式、同窓会、有らゆることに絵葉書を発行して永く記念することが絶えませんので、其の商店は、日に増し殖えるばかりであります。」と、ある程度の人口の町には、名所旧跡がなくても絵はがきがあり、何か出来事があると絵はがきが作られるとあります。今日、事件や行事など、一時的なことを絵はがきの絵柄にするのは珍しいでしょう。絵はがきが発行され始めた頃は、新聞はありましたが写真はあまり多くなく、絵はがきは新しいニュースを知ることのできるメディアの一つとして受け入れられていました。また、会社や学校などの周年行事や新築・増改築などの記念絵はがきも作成されました。

文京区に関する絵はがきも残っています。東京大学の正門や赤門、江戸川の桜、お茶の水橋、聖橋、後楽園、六義園など、東京の名所として知られていた場所、博文館など区内にあった会社のものなどさまざまです。そのなかに、小学校の記念絵はがきがあります。それらは、写真の少なかった時代の小学校のようすを知ることのできる貴重な資料です。

小学校の絵はがき

ふるさと歴史館で所蔵している絵はがきは、根津小、駒本小、関口台町小、林町小、汐見小など現在もある小学校や、追分小、真砂小、富士前小など、閉校になった小学校のものもあります。それらの絵はがきの入っている袋などから、絵はがきは、開校

【図3】東京市関口台町小学校

や改築、増築の記念に発行されたものが多いとわかります。昔の小学校の建物、教室や設備などのようすが、絵はがきから伝わってきます。

●根津小学校

根津小学校は、明治30年(1897)に開校しました。明治41年に類焼により校舎が焼失し、明治44年に場所を移転して、新校舎が完成しました。根津小学校の絵はがき【図1】は、同窓会の10周年記念に作られたもので、新校舎の絵が描かれています。「根津小学校同窓会創立十周年紀念」「明治四十五年五月廿六日」の文字と根津小学校の校章が描かれたスタンプが捺(お)されています。明治38年頃から、逓信(ていしん)省で記念絵はがきを発行すると、記念の日付のついたスタンプを作り、それを捺すようになりました。そして、スタンプ付の絵はがきを集めることも流行しました。根津小学校の同窓会でも、これを真似たのかもしれません。

●林町小学校

林町小学校は、明治43年(1910)に開校しました。絵はがきは、開校15周年に校舎を増築した記念に発行された4枚組のものです。旧校舎と増築した新校舎、校長先生の写真【図2】や、教室・裁縫教室、手工教室・理科教室・増築校舎・屋上運動場、廊下・階段など、新旧の校舎のようすがわかる絵はがきです。

●関口台町小学校

関口台町小学校の絵はがきは、大正14年(1925)の開校記念に発行された8枚組のものです。校舎の外観【図3】を始めとして、玄関・廊下、講堂・作法教室、唱歌教室・裁縫教室、教室・廊下手洗場、地理歴史教室、理科教室、金工教室・機械室、手工教室・図画教室と校内のさまざまな場所が写されています。『小石川区史』(昭和10年発行)には「特別施設としては各種特別室、教授用器具機械等一般に設備が優良で」とあります。絵はがきからも、それぞれの教科の教室や設備のようすがわかります。

【図4】東京市汐見小学校（内面）

【図5】本郷区市立小学校　第三回聯合運動会　障害物競走

●汐見小学校

汐見小学校の絵はがきも、昭和2年(1927)の開校時に発行されました。汐見小学校は、近隣の根津小学校、千駄木小学校の児童数が関東大震災後に急増し、授業を二部制にしていたことから、それを解消するために設置されました。鉄筋コンクリート4階建、コの字形に配置された校舎が、絵はがき【図4】からもわかります。

●本郷区市立小学校連合運動会

明治37年(1904)から、本郷区市立小学校(当時、小学校は東京市立でした)が集まって連合運動会を行い、その後も不定期に続きました。第3回連合運動会は、明治43年11月14日に開催されました。この運動会のようすも、絵はがきとして発行されました。「球竿体操」「障害物競走」【図5】、「余興自転車曲乗」の絵はがきには、それぞれ競技のようすと応援する児童が写り、運動会らしい旗やテントなども見えます。

さまざまな絵はがき

学校、会社、商店など名所旧跡以外の場所が写った絵はがきも、たくさん残っています。昔は今日のようにカメラや携帯電話で簡単に写真を撮り、残しておくことができませんでした。写真が少なかった時代、絵はがきを記念(記録)として手に入れようとした人も、多かったのではないでしょうか。そのため、何かが起こったり、記念となる時には絵はがきを発行したのでしょう。文章を書いて送るものとして作られた絵はがきですが、明治の流行の頃から、送る以外に集めるものとしても広まっていました。今よりも、絵はがきは人々にとって日常的で身近なものだったのでしょう。

今年度の収蔵品展では、文京区内の絵はがきを中心に展示します。小学校を始めとして、文京区内の名所や会社などの絵はがきを紹介します。9cm×14cmのなかの昔の文京を眺めてみませんか。

(齊藤 智美)

【参考文献】

『郵政百年史』1971年　郵政省
『文京区教育史－学制百十年の歩み－』1983年　文京区教育委員会
『開校百年記念誌　すすめ根津っ子』1997年　文京区立根津小学校百周年記念事業実行委員会
『学校と家庭63　開校百周年記念誌　林町』2010年　林町小学校開校百周年記念事業実行委員会
『関台のうつりかわり－創立五十周年記念－』1975年　文京区立関口台町小学校・関口台町小学校父母と教師の会
『開校五十周年記念誌　伸びゆく汐見』1978年　開校五十周年記念事業委員会

弘化三年正月の大火

“火事と喧嘩は江戸の華”などという言葉もあるように、江戸は非常に火事の多い都市でした。明暦3年(1657)の明暦大火(振袖火事)、天和3年(1683)の天和大火などの有名な大火事以外にも、一説には3年に一度とも言われるほど、頻繁に大火事が起きていました。

ふるさと歴史館一階の常設展示室には、一枚の「瓦版」(以下、かわら版)が展示されています。かわら版とは、江戸時代に発行されたニュース性の高い印刷物のことで、人々はかわら版によって、様々な情報を入手していました。

このかわら版は、弘化3年(1846)1月15日に発生した、火事の様子を伝えたものです。火事の被害範囲、被災状況を解説した文章に、被災した地域の地図が添えられています。

頃ハ弘化三丙午正月十五日八ツ時頃、本郷丸山辺ヨリ出火致シ、菊坂辺、阿部様下屋敷、本郷通リ、加賀様少々焼、湯嶋六ヶ町、御茶水、聖堂焼ケ…(以下略)

と、正月15日の午後2時頃、本郷丸山(現在の西片、本郷五丁目辺り)から出火し、菊坂、本郷通りから、湯島方面へと燃え広がっています。さらに神田、室町、日本橋などを焼き、最終的には鉄砲洲、佃島にまで燃え広がりました。結局、翌16日の0時頃になってようやく鎮火し、「**人々あんどの思ひをな**」したと書かれています。このかわら版によると、35の大名屋敷と90余の旗本屋敷、瀬戸物町など360町が焼けたとされています。

また、火事の被災者を救済するために、神田佐久間町、江戸橋四日市、八丁堀松屋町の3か所に、御救い小屋が建てられました。御救い小屋とは、被災者を収容して食事を与えたほか、元手金を給付するなど自活の手伝いをした施設で、大火事や洪水の後に建てられました。御救い小屋の記述の最後には、「**正月十七日**」の日付があることから、火事の2日後には、早くも御救い小屋が建てられていたことがわかります。この火事に関するかわら版は、ここにあげた以外にも、何種類かの存在が確認されています。このかわら版は、火事後数日経って、火事後の状況も追加して発行されたものと思われます。

江戸の事件や噂話が集められた『藤岡屋日記』には、火事の様子だけでなく、細かい出火地点やこの火事を謳った狂歌なども紹介されています。これによると、火事の火元は、本郷丸山の西、小石川阿部上地(現、白山一丁目辺り)に住んでいた一橋家家臣、坂本林平の家であるとされています。そして、

小石川　尋ね来て見よ　火元なる
阿部のあげ地の　うらのくずの家
もん計り　残るやしきが　火元にて
名は坂本の　林平といふ

などと、謳われていました。また、本郷は明暦の大火の火元とも言われることから、口さがない子供たちの間では、「火事はどこだ！」「丸山だ!」という掛け言葉が流行したとも記録されています。

火元近くにあった備後国福山藩(現、広島県福山市)阿部家の丸山屋敷でも、敷地の一部を焼失しました。阿部家に残された記録によると、邸内にあった家臣の屋敷や長屋の一部、土蔵4棟などが焼けたほか、前藩主阿部正寧(藩主、阿部正弘の兄)や子供たちの住む御殿も、焼失したようです。火事の後には、正寧が丸山屋敷内に焼け残った茶室に、子供たちは本所石原(現、墨田区本所)の屋敷に、仮住まいしたと記されています。また家臣の屋敷の中には、火の通り道でありながらも焼け残った屋敷もありました。その屋敷が瓦屋根であったことから、後年阿部家では、敷地内の屋敷を瓦屋根にすることを命じたりもしています。

江戸大火に始まった弘化3年は、2月に仁孝天皇が崩御、閏5月にはアメリカ船が浦賀に来航し、6月中旬からは記録的な大雨が続き、11月には大坂でも大火があるなど、激動の年となりました。当時幕府老中の座にあった阿部正弘にとって、激動の始まりを告げる火事でした。

(加藤　芳典)

平成23年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「わがはい君探検隊　昔のくらしを知ろう！」

◆7月20日（水）～8月31日（水）　参加者数……244人

歴史教室

歴史講座

「文京ゆかりの文学者と装丁デザイン―夏目漱石と橋口五葉を中心に―」

講師：岩切信一郎氏（新渡戸文化短期大学教授）

◆9月23日（金）　会場：文京区男女平等センター　参加者数……64人

歴史講座

開館20周年記念特別展

「坂道・ぶんきょう展」

◆10月22日（土）～12月4日（日）（延べ38日間）　入館者数……5,928人

◆記念講演会

10月30日（日）　会場：文京シビックホール小ホール　参加者数……288人

「鷗外の坂・一葉の坂」／森まゆみ氏（作家）

◆展示解説　10月28日（金）、11月12日（土）

特別展

収蔵品展

「伯爵家のまちづくり―学者町・西片の誕生―」

◆2月11日（土）～3月18日（日）（延べ32日間）　入館者数……3,133人

◆展示解説　2月22日（水）、3月4日（日）

収蔵品展

ミニ企画

◆ 4月19日（火）～ 7月24日（日）「文京区と鷗外―記念館誕生へ―」

◆ 7月27日（水）～10月10日（月）「昔の道具　これは何?」

◆10月12日（水）～12月25日（日）

「坂道・ぶんきょう外伝―様々な、そしてそれぞれの坂の上の雲」

◆ 1月 5日（木）～ 2月12日（日）「吉祥の絵画―音羽・三ツ矢酒店旧蔵資料より―」

◆ 2月14日（火）～ 4月 1日（日）「伯爵さまの幼稚園」

ミニ企画　坂道・ぶんきょう外伝

ミニ企画　吉祥の絵画

史跡めぐり

◆第1回　6月28日（火）「江戸の名庭園―小石川後楽園を歩く」

参加者数……51人

◆第2回 11月10日（木）「本郷界隈の坂道を歩く！」

参加者数……55人

◆第3回　3月 2日（金）「区境を歩く―御茶ノ水から―」

参加者数……37人

史跡めぐり

平成24年度の催し

※事業内容の詳細は「区報ぶんきょう」および歴史館ホームページにてお知らせします。

ミニ企画
昭和初期の広告　― 商店双六 ―
4月3日（火）～6月24日（日）
その他テーマにて、年度内に計4回の展示を予定しています。

小・中学生のための歴史講座
歴史館でクイズに挑戦！　わがはい君歴史塾
7月21日（土）～9月2日（日）
文京ふるさと歴史館の展示を見学して、文京区の歴史についてのクイズに挑戦しよう！

歴史講座
駒込のやっちゃば　― 江戸三大市場 ―（仮）
9月8日(土)14～16時　講師 熊井保氏（東京家政学院大学教授）
参加費：200円　定員：60人（超えた場合抽選）
申込方法：往復はがき（1人1枚にて）　締切8月23日（木）必着

史跡めぐり
歴史館友の会まち案内ボランティアが、区内の史跡等をご案内します。
年3回（6月、12月、3月）開催予定。要申込（往復はがきにて）。
参加費（保険）40円。

特別展
洪庵、知安、そして鷗外 ―近代医学の医学者（ヒポクラテス）たち―（仮）
10月27日(土)～12月9日(日)　※11月3日（文化の日）は無料公開日
鷗外生誕150年記念事業の一環として、衛生学者森林太郎と、文京ゆかりの医学者たちの足跡を紹介します。

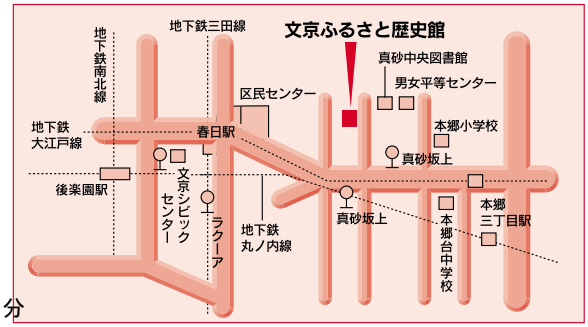
森鷗外生誕150年記念事業
鷗外ゆかりの史跡めぐり（バス利用）
11月22日（木）に開催予定。要申込（往復はがきにて）
新たに開館する森鷗外記念館の見学も含めて、都内の森鷗外関係史跡を昼食も含んでバスでご案内します。参加者負担金あり。

森鷗外生誕150年記念事業
鷗外ゆかりのまち歩き
11月中に2回開催予定。要申込（往復はがきにて）
森鷗外に関係する区内史跡を中心に、歴史館友の会まち案内ボランティアがご案内します。参加費（保険）40円。

収蔵品展
9cm×14cmの世界　― 絵はがきに見る文京 ―（仮）
平成25年2月9日（土）～3月17日（日）
文京ふるさと歴史館で所蔵する絵はがきから、文京の名所や昔の出来事を紹介します。

利用のご案内

◆開館時間：午前10時から午後5時まで
◆休 館 日：月曜日・第4火曜日（休日にあたるときは翌日）
　くんじょう期間、年末年始
◆入 館 料：一般個人100円、団体(20人以上)70円
　中学生以下・65歳以上無料
　＊特別展は別に定めます
◆交　　通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
　都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
　都営バス 都02 上69　「真砂坂上」から徒歩1分
　文京区コミュニティバスＢーぐる「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分



文京ふるさと歴史館

◆ホームページ：http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/　〒113-0033　東京都文京区本郷四丁目9番29号　電話(03)3818-7221